

## 英語の力

神村ふじを

中学校から大学の教養課程までの8年間、英語と向き合わざるを得なかった。本来あまり英語が好きでなかったのかもしれない。8年間も勉強して話せるどころか英文の意味を理解するにも時間がかかる。ネイティブな話者の英語に至っては、早口過ぎて何のことを言っているのかさっぱりわからない。

自分の能力や意欲を棚に上げて、「日本の英語教育はてんでなっていない。文科省は何をしているんだ」などと教育のせいにしてしまう自分に気づく。自分が教育に関係していたことなどはるか彼方のことのように思ってしまう昨今である。

突然ウクライナの話になるが、ウクライナのゼレンスキー大統領が国連で演説したことがあった。ネイティブではないので、たぶん流暢な英語ではないのだろうが、私にも聴きやすくわかりやすい英語だった。ウクライナの窮状を訴え、国際的な支援を要請していた。

聴く限りでは、ウクライナ語と英語は似ている気がしないのだが、昔習った言語学では、インド・ヨーロッパ語族という分類があり、ひよつとしたら言語間に何かしら似通ったところがあった。抵抗なく喋ることができているのかもしれない。だとすると、ウクライナの子どもたちも英語を話したり理解できているのかもしれないと思った。以前台湾の高校生を交換留学生として学校に招いたことがあったが、彼らも英語には抵抗がなかった。国際化ははるかに進んでいると感じていた。

世の中の国際化は避けて通れない。ひよつとしたら、勤めている会社の上司に突然外国人がやって来るかもしれない。メールでもやりとりは英語でないと商談もまともならない時代がやって来ている。英語は日常会話として身に付けないよりは身に付けた方がいいに決まっている。

福島県の天栄村てんえいむらに「プリティッシュヒルズ」という施設がある。英国文化を体験できる施設として、1994年（平成6）に開設された。英語を学ぶということは英国文化を学ぶことというコンセプトのもと、「パスポートのいらぬ英国」として英国中世の荘園領主の館（マナーハウス）を中心とした街を忠実に再現し、英国文化のルーツを体感できるようになっている。

私の町では、この施設に毎年中学2年生を全額町の費用で送り出し、体験学習をさせている。ホテル形式の施設となっており、食事も宿泊もできるので、中学生たちは修学旅行が1回増えたような気分で、楽しく参加しているようだ。施設に入れば英語しか話してはならないルールがある。だ

から英国感にどっぷりと浸ることができる。

そのことで格段英語力が付くかどうかは疑問だが、英語というものを考える、また意識するきっかけになるのは間違いない。

帰って来てから、2年生の英語の授業を見たことがあった。授業に勢いがあり、英語を話すことに抵抗がなくなっていることがわかった。さっと手が挙がり、発音も元気で小気味よい。思春期真っ只中の彼らは、目立つことを嫌がり、わかっている手も挙げない授業を数多く見てきた。ところがである。「ブリティッシュヒルズ」帰りの彼らは明らかに違って見えたのだ。

英語で思い出すのは、高校生の時に見たハンフリー・ボガートとイングリッド・バーグマンの「カサブランカ」のことである。年配の層にはお馴染みの映画だったが、高校生の自分にとっては新鮮そのものだった。

その中の有名なシーン。ボガートがバーグマンにグラスを傾ける。「君の瞳に乾杯！」と和訳が出ていたので、乾杯したんだとわかったが、そのニヒルなボガートの発音がかっこよくてしびれてしまった。英語で何と言ったのか、なぜ「君の瞳に乾杯」なのか。そこまで考えればもっと英語力が付いたのに、しびれたところで終わってしまった。

大人になってから、「カサブランカ」は高瀬鎮夫という人の名訳の映画であり、「Here's looking at you, kid.」は直訳すれば、「君を見ていることに乾杯」になることを知った。それを「君の瞳に

乾杯」と意識したのは、流石としか言いようがない。

雰囲気は雰囲気として理解したので、映画好きの高校生には十分だったと思うが、わからない単語が出たらタブレットで調べたり、身近にネイティブのALT（外国語指導助手）がいる今の環境の中学生と比べれば、英語の力が付かなかったのも当然と言えば当然だったと自分を納得させている。

せめて洋画を見たときに字幕の力を借りないで理解することができたら……。BSのワールドニュースを直接理解することができたら……。もっともっと世界は広がるのだろうかと思う。

山形県の子どもたちは、三カ国語を話せる。英語、日本語、山形弁。「バイリンガル」ならぬ「トリリンガル」だと言われるようになることを願って止まない。

朽ち果てし戦車の骸春の泥 ふじを